

研究会報告

AI を活用した研究者：

新たな可能性と課題

今年 10 月 24 日、当学科は人工知能（AI）が科学技術分野における影響をテーマに、AI がもたらす機会、課題を探る研究会を開催した。今回の研究会は、学部教員が特定のトピックについて意見を発表し、その後、他の教員と幅広い議論や意見交換を行うという新しい形式の初回会合であった。私（ベルタラニチュ）は最初の発表者として、このトピックを紹介した。二番目の発表者であるリッチー・ザイン先生は、ニュージーランドにおける AI 技術の規制・政策動向と教育への応用について発表した。3 人目の発表者である淵田仁先生は、哲学的な立場からこのテーマについて専門的な見解を述べた。以下のページでは、各プレゼンテーションの概要を簡潔に紹介する。

ニール・ポストマンと AI 中心のテクノクラシーの到来

ベルタラニチュ・ボシティアン

城西大学 現代政策学部

2024 年、人工知能（AI）に直接関連する研究にノーベル物理学賞と化学賞が授与された。ジョン・ホップフィールドとジェフリー・ヒントンは、人工ニューラルネットワークを用いた機械学習の先駆的研究によりノーベル物理学賞を受賞した。しばしば「AI のゴッドファーザー」と呼ばれるヒントン氏は、トロント大学での記者会見で、AI の将来性と課題について冷静な見解を述べた。彼は、AI の社会的インパクトと産業革命のインパクトを並列に描いたが、重要な違いがある。「AI は体力で人を超えるのではなく、知的能力で人を超えるだろう」。ヒントン氏はさらに、AI の台頭は「多くの点で素晴らしいものになるだろう」と述べ、このテクノロジーから大きな恩恵を受けそうな 2 つの分野として、ヘルスケアと職場の生産性を挙げた。しかし、「我々はまた、起こりうる多くの悪影響、特にこれらのシステムが制御不能になる脅威を心配しなければならない」と彼は警告した⁽¹⁾。

ヒントンによる AI の有望性と懸念点の双方を視野に入れた均衡的アプローチは、著名なアメ

(1) “Geoffrey Hinton Wins Nobel Prize in Physics | University of Toronto,” accessed December 25, 2024, <https://www.utoronto.ca/news/geoffrey-hinton-wins-nobel-prize>.

リカのコミュニケーション理論家であるニール・ポストマンが提示した技術進歩とその社会的影響に関する視座と共鳴する。ポストマンは1992年の著作『テクノポリー』において、「技術変化は加算的でも減算的でもない。それは生態学的である」と論じている⁽²⁾。この指摘は、産業革命やIT革命に匹敵する画期的な技術革新が、社会環境を根底から再構築する潜在力を有していることを強調するものである。こうした変容は人類史において反復的に生起してきたが、近年の顕著な事例としては、アップル社のiPhoneに象徴される電話の再発明が挙げられる。AIの急速な発展は、この継続的な技術的混乱（disruption）を引き起こす次なる段階に位置づけられると推察される。

既述の通り、ポストマンはさらに、AIのような新しい技術革新は、単に既存の世界に何かを付加したり、差し引いたりするだけではなく、我々の関心の構造、すなわち「我々が思考する対象」を根本的に変容させると展開している。さらに、テクノロジーは我々のシンボルの性質、すなわち「我々が思考に用いるもの」をも変質させる⁽³⁾。結果として、社会の基本的な認識論的基盤一何が妥当な知識を構成するのか、どのように知識を獲得するのか、そしてどのように学ぶのかということさえも一が変容を余儀なくされるのである。

ポストマンの批判的分析はさらに続き、人間とテクノロジーの進化する関係を理解するための歴史的枠組みを提供している。彼は、最も初期の段階を「道具使用文化」の段階と特定し、そこでは料理や水の供給などの特定の実際的な課題に対処するために技術的な解決策が用いられていた。しかし、ポストマンによれば、テクノロジーが進歩するにつれて、その役割と影響は拡大し、伝統、儀式、神話、さらには宗教にまで影響を及ぼすようになり、しばしば自然現象に対する代替的な説明を提供したり、社会慣習を変更したりすることによって影響を及ぼした。テクノロジーは、近代科学の台頭と相まって、伝統社会の自然、社会、イデオロギーの構造を再構築し始めた。ポストマンは、文化発展におけるこの段階を「テクノクラシー」と呼んでいる。

テクノクラシーにおいては、テクノロジーはもはや単なる道具、人間の目的に従属する価値中立的な手段ではなくなり、政治的および経済的目的のために用いられる推進力、手段となる。例えば、ヨーロッパによる植民地主義的、帝国主義的膨張は、このテクノクラシー的進化の有力な歴史的事例であり、そこではテクノロジーが政治的、経済的支配の行使を積極的に可能にしたのである。

コンピュータ技術の出現と情報技術革命は、人類とテクノロジーの進化する関係における新たな段階、すなわちポストマンがその代表的著作のタイトルとした「テクノポリー」という段階をもたらした。ポストマンにとって、コンピュータと情報技術は、計算する精神が至上かつ無制限に君臨する、この新しい技術科学的生息環境の典型的な道具を代表するものである。彼は、テクノポリーにおいては、あらゆる形態の精神生活が技術とテクノロジーの主権に従属させられ、最

(2) Neil Postman, *Technopoly* (Knopf, 1992), 18.

(3) Postman, 20.

終的には人間性そのものの価値の低下につながると警告している。彼が痛切に述べているように、この段階では「人間がテクノロジーの自由に使えるようにされたとき、社会は最もよく機能し、[...] 人間はある意味で機械よりも価値がない」のである⁽⁴⁾。

ポストマンによって明確に示されたこの技術環境の概念は、イタリアの哲学者ウンベルト・ガリンベルティの研究において現代的な共鳴を見出すことができる⁽⁵⁾。マルティン・ハイデガーの技術哲学に基づき⁽⁶⁾、ガリンベルティは、我々の現在の技術科学的進歩は、特に過去の道具使用段階と比較して、ますます無目的になっており、この点は彼の最近の論評でさらに明確にされている。彼は、この抑制のない技術発展が、人類の解決能力を超える可能性のある問題を生み出していると警告している。この文脈において、テクノロジー、特に AI の形態は、解決策としてではなく、自己永続的な問題として提示され、悪循環を生み出している。ガリンベルティは、AI をポストマンが「テクノポリー」と特定したものの進行における次のステップと見なしており、人間の理性と自律性のさらなる放棄を意味している。ガリンベルティの視点からすると、この AI 中心のテクノポリーは、進歩というよりも、差し迫った大惨事のように見えるのである。

参考文献

- “Geoffrey Hinton Wins Nobel Prize in Physics | University of Toronto.” Accessed December 25, 2024.
<https://www.utoronto.ca/news/geoffrey-hinton-wins-nobel-prize>.
- Postman, Neil. *Technopoly*. Knopf, 1992.
- Umberto Galimberti. *Psiche e Techne: L'uomo Nell'età Della Tecnica*. Feltrinelli Editore, 2008.
- Wendland, A J, C Merwin, and C Hadjioannou. *Heidegger on Technology*. Routledge Studies in Twentieth-Century Philosophy. Taylor & Francis, 2018.

(4) Postman, 52.

(5) Umberto Galimberti, *Psiche e Techne: L'uomo Nell'età Della Tecnica* (Feltrinelli Editore, 2008).

(6) A J Wendland, C Merwin, and C Hadjioannou, *Heidegger on Technology*, Routledge Studies in Twentieth-Century Philosophy (Taylor & Francis, 2018).

ニュージーランドの AI 政策：

イノベーションと規制のバランスに関する包括的考察

リッチー・ザイン

城西大学 現代政策学部

人工知能（AI）は、21 世紀において最も変革的な技術の一つであり、世界各国に前例のない挑戦と機会をもたらしている。急速な進化を続ける AI は、経済、社会、教育、そして我々の日常生活のあらゆる側面を根本的に再構築しつつある。各国政府は、イノベーションの促進と社会的責任のバランスを取るという複雑な課題に直面しており、ニュージーランドは、この課題に対して特に先進的かつ慎重なアプローチを採用している。小規模ながら革新的な国として、ニュージーランドは AI の可能性を最大限に活用しつつ、倫理的・社会的な影響を十分に考慮する独自のモデルを追求しているのである。本報告書では、この複雑な状況におけるニュージーランドの戦略的位置づけと、AI がもたらす変革的な可能性を詳細に検証するものである。

AI に対するニュージーランドの戦略的アプローチ

ニュージーランド政府は、21 世紀における技術革新の最前線に立ち、AI の可能性と課題を慎重かつ先見的に検討している。元首相ジャシンダ・アーダーン氏が指摘したように、「テクノロジーの進化はあまりにも急速で、単一の規制で解決することはできません。解決策は、動的であり、さまざまな領地で機能し、問題を迅速に予測して対応できるものでなければなりません。公開書簡のような悠長なことをしている時間なく、政府だけではこの仕事を成し遂げることはできません。責任は、AI を開発する人々を含め、すべての人にあるのです。」(1)

政府は、AI がもたらす経済的変革と社会的影響を多角的に評価している。農業、医療、環境管理、教育、政府サービス、ビジネスなど、広範囲にわたる分野で AI の戦略的な導入が進められている。これらの分野では、技術革新の促進と同時に、倫理的配慮、社会的影響、潜在的リスクの慎重な管理が求められる。

政策形成の理論的枠組みと実践的アプローチ

商業・イノベーション・雇用省（The Ministry of Business, Innovation & Employment）は、ニュージーランドの AI 政策における中心的な推進力として機能している。同省は、単なる技術支援にとどまらず、社会全体の持続可能な発展を見据えた包括的な戦略を展開している。研究開

発への戦略的投資、公共部門への AI 統合、国際的な協力と知識交換を通じて、責任あるイノベーション（responsible innovation）を追求していると言える。倫理基準は、この政策アプローチの根幹を成している。プライバシー権の尊重、潜在的な社会的偏見の防止、国際的な倫理フレームワークとの整合性確保は、単なる理想論ではなく、具体的な政策立案における重要な指針となっている。

教育分野における AI の革新的応用

教育技術の領域は、AI の可能性を最も明確に示す分野の一つである。Kiwi Education Technology が開発したプラットフォームは、適応型学習技術の可能性を具体的に示している。AI チューターは、従来の教育モデルを再構築しつつ、数学や科学において個々の学生に高度にパーソナライズされた学習体験を提供している。この技術革新は、同時に慎重な検討を必要とする。プライバシーに関する懸念、教育者の役割の変化、テクノロジーへのアクセスの公平性、学術的誠実性の維持など、解決すべき課題が存在する。それでもなお、遠隔地や教育リソースが限られた地域の学生の教育機会を拡大する可能性は極めて有望であると言える。

未来への展望と課題

ニュージーランドは、AI の規制と発展において、複雑な社会的・経済的課題に直面している。雇用市場の変化、データセキュリティの保護、社会経済的不平等の予防は、喫緊の課題である。特に、先住民のマオリ族コミュニティを含むすべての人々に公平かつ包括的な利益をもたらすための、慎重に設計されたアプローチが求められる。AI フォーラムが提示した「ニュージーランドのための AI」は、今後 5 年間の戦略的なロードマップを示している。農業、建築、クリエイティブ産業、教育、環境、健康の 6 つの重点分野における人材育成と、官民セクター間の連携強化を中心的な戦略としている。

結び

ニュージーランドは、技術革新と社会的責任の繊細かつ動的なバランスを追求している。急速に進化する技術環境に柔軟かつ戦略的に対応し、社会全体の長期的な利益を最大化することが、今後の重要な課題となるであろう。

参考文献

AI Forum of New Zealand. "AI Blueprint for Aotearoa 2024." <https://aiforum.org.nz/wp-content/>

uploads/2024/07/AI-Blueprint-for-Aotearoa-2024.pdf.

Ministry of Business, Innovation, and Employment (MBIE). “Approach to Work on Artificial Intelligence.” <https://www.mbie.govt.nz/dmsdocument/28913-approach-to-work-on-artificial-intelligence-proactiverelease-pdf>.

Ministry of Business, Innovation, and Employment (MBIE). “Artificial Intelligence: Shaping a Future for New Zealand.” <https://www.mbie.govt.nz/dmsdocument/5754-artificial-intelligence-shaping-a-future-new-zealand-pdf>.

New Zealand Privacy Commissioner. “Website.” <https://www.privacy.org.nz/>.

New Zealand Law Foundation. “Ethics of AI Report.” <https://www.lawfoundation.org.nz/>.

Washington Post. “Jacinda Ardern’s Plan for Artificial Intelligence in New Zealand.” Last modified June 9, 2023. <https://www.washingtonpost.com/opinions/2023/06/09/jacinda-ardern-ai-new-zealand-planning/>.

Ministry of Business, Innovation, and Employment (MBIE). “Approach to Work on Artificial Intelligence.” <https://www.mbie.govt.nz/dmsdocument/28913-approach-to-work-on-artificial-intelligence-proactiverelease-pdf>.

AI と Homo judicans の終わり

淵 田 仁

城西大学 現代政策学部

1. AI と哲学の長い歴史

現在の AI（生成 AI）ブームが生じる以前から、AI と哲学は深い関係にあった。第一次 AI ブーム（1950-60 年代）、第二次（1980 年代）、第三次（2000 年代 - 現在）はその技術的展開に合わせて生じているが、哲学の領域では早い段階から AI の哲学的問題が議論されていた（McCarthy & Hayes, 1969）。

ただ、私の関心は AI を哲学的に考えるのではなく、AI が私たちの社会のなかでいかなる社会的機能を果たすのか、人類史において AI をどう位置付けるのか、にある。そして、AI によってこの社会体制がどのような影響を被るのか。これである。

そこで、私が導入したいと考える概念が「Homo judicans（ホモ・ユディカンス）」である。これは私の造語で、ホモ・サピエンスやホモ・エコノミクスのようなラテン語表記を使い人間存在の特徴を規定する語である。その意味は、「決定する人間」である。AI という現在誰でも使うことができるものについて考える際に、この重々しい語を導入することの意義について考えるには、一度 AI から離れて人類史を振り返る必要がある。

2. Homo judicans としての人類史

人類史を紐解けば、古来より人間はさまざまな制度を構築してきた。例えば、『聖書』の成立、『ローマ法』の整備等々、人間は正しさの基準の制定に努めてきた。複数人で共に生きることを選んだ人間の歴史は、争いの歴史である。西洋政治思想史を振り返れば、そこに登場してくる理論は、いかなる決定を共同体の決定とみなすかという問題をクリアするために要請されたものと言える。

決定の理論、正統性を追い続けた人間は、ヨーロッパ世界の近代においてひとつの到達点に達したと考えられている。それが、「自律 autonomie」である。他の者によってではなく自分自身で自分のことを決める、自分自身と約束するという意味の自律である。この自律の政治思想の立役者が、ジャン＝ジャック・ルソーである。彼の『社会契約論』の一つの到達点を挙げるとすれば、それは主権の自律性である。ホッブズの場合、外部から到来する超越的な主権者によって被

統治者たちが安定するというシステム設計であった。それに対し、ルソーは、自分自身各人が主権者となり、自分自身を被統治者とする、という自律的な構造（内在から超越が生じる）として政治制度を描いた。本稿の問題設定に合わせて言えば、他者に依存する決定から自己決定へと近代の政治思想の歴史は変化してきた。

日本の政治システムにおいてもルソーの自律の思想の影響を被っている。私たちの意志を選挙で選出された代表者（＝国会議員）に委ねる。そして、その各人の意志の代表者たちは国家で議論し、法を作る（立法）。その法に私たちは規定される。このように考えれば、法は私たちの意志の具現化であり、他者が作る法に規定されるのではなく自分自身が自分に法を課するという約束の行為であると言える。

3. 決定のアポリア

ところで、私が「ユディカンス *judicans*」という語を重視する理由は、その語の歴史性にある。決定／判断／決断を意味する *judgement*（英）は *judicare*（羅）に由来する。エミール・バンヴェニストによれば、*judicare* は *jus*（法）＋*dicere*（言う）から成る語である（Benveniste 1969）。つまり、*judgement* とは法を言うこと、法を立てる（立法）を意味する法を媒介とする言語行為である。

さて、この決定と法の語源的关系性を見た上で、決定／判断が理論的に内在するアポリアについても言及したい。決定することの正統性を人間が洗練させてきた（その決定の正しさはここでは問題とならない）一方で、決定という振る舞いには原理的なアポリアが存在する（この問題に関しては宮崎 2009 の序に依拠している）。

通常、法とは、一般の規則・基準のことを意味する。そして、裁判官は法令や判例から手続き的に正当な仕方でも個別事例を違法かどうか、適法かどうかを判断する。このように考えた場合、ひとは個別に対して一般の法を適用することそれ自体がある種の自動的・機械的な作業のように思うだろう。しかし、問題は一般的な法を個別の事実「適応」する瞬間に生じる。個別事例が適法か違法かの判断の瞬間には、そこにはその判断を支える支点は存在しなくなる。つまり、法的判断にはつねに法の「不在」の瞬間が入り込まざるを得ない（ゆえに、判断後にも異議申し立ての可能性が内在する）。これが決定／判断が構造的に抱えるアポリアとなる。

人間が決定の正当性／正統性を確保しようとする一方で、人間の決定には理論的にその基礎の不在が露呈する。こうした不安定な構造それ自体が、決定の正しさを希求してきたのである。

4. 決めてもらいたい人間

決定のアポリアを踏まえ、決定の問題について考えてみると、不思議なことが分かる。それは、決定することを求めてきた人間は一方で、決めてもらいたい存在でもあるということであ

る。

例えば、先の自律について考えてみようこうした自律の重視という近代の振る舞いは、真の意味で自律なのか。日常的なものの言い方で言えば、近代的自律とは「自律っぽい他律」ではないか。つまり、自己決定に見せかけつつも、そこに他者性が入り込むような自律なのではないか、という疑念である。

この「自律っぽい他律」は、私たちの日常的な出来事のなかで多く見出すことができるだろう。例えば、朝の情報番組でやっているような占いである。朝、何を着て行くか、私たちは決定できない。そうしたときに、「ラッキーカラーは赤」と言ってくれるテレビの占いが洋服選びをする私たちの背中を押す。社内で事業方針を決めかねるとき、外部のコンサルタントが根拠らしきものを提案し、決めてくれる（昨今のコンサルタントと西洋政治思想史における「立法者」の連続性も指摘できよう）。精神分析家を經由して患者は自己の問題を発見する等々。アドバイス、助言、コンサルタント。自己決定せよという主体性への希求の裏側には、決めてもらうための装置が蔓延っている。

ここでようやく AI の話に戻って来ることができる。AI は社会を変えと言われて久しいが、人類史的観点から見た場合、その社会的効用それ自体は古くからあるあり方とも言えるだろう。人間は決定できないことそれ自体によって決定しようと努めてきた。AI の決定を委ねられるのか。その問題は、人間が Homo judicans でいることを終えられるかどうかにかかっている。

参考文献

- Benveniste, Émile, 1969, *Le Vocabulaire Des Institutions Indo-Européennes*. Paris: Éditions de Minuit.
- McCarthy, John & Hayes, Patrick, 1969, "Some philosophical problems from the standpoint of artificial intelligence." In B. Meltzer & Donald Michie (eds.), *Machine Intelligence 4*. Edinburgh University Press. p. 463-502.
- 宮崎裕助, 2009, 『判断と崇高』, 知泉書館.